安曇樹香（スクールリーダーシップ開発専攻）

当たり前のようで当たり前じゃないもの

1. 教育を考える一言

「人間は、自らの属するコミュニティの社会文化的活動への参加のしかたの変容を通して発達します。そしてそのコミュニティもまた変化するのです。」（バーバラ・ロゴフ，當眞千賀子訳，『文化的営みとしての発達—個人、世代、コミュニティ—』新曜社，2006，p.11）

2. 背景

著者は現在、カルフォルニア大学教授。これまでヴィゴツキーを中心とした社会・文化・歴史的心理学を代表する一人として、グアテマラのマヤのコミュニティで研究を展開してきました。近年は、学校がまだ普及していない北米・中米先住民のコミュニティで、社会的相互行為による学びの過程に着目した研究を行なっています。

本書は人の発達に関する社会文化的・歴史的理論を展開しています。発達段階の一般化ではなく、文化コミュニティの一員として人はどのように成長するかを追究します。ロゴフは次のように述べています。「人は文化の活動に参加しかかわりながら発達するのであり、文化の活動も世代を越えた人々の関与によって発達的に変化するものです。各世代の人々は、他者とともに社会文化的営みにかかわる過程で、前の世代から受け継いだ文化的道具や実践を活用し、拡張します。人々は、文化的道具の共同使用や実践を通して発達しつつ、同時に文化的道具、実践、制度の変容に手を加えることになるのです。」（pp.66-67）私がこの本に出会ったのは、大学 3 年生の時です。受講した授業で紹介されたのをきっかけに興味を持ちました。この本からは、ここでは書き切れないくらいたくさんのことを学びましたが、とくに心に残ったのが上記の一言でした。

3. 考察

私たちは当たり前だと思っているけれども、別の文化ではそうではないことがあります。例えば、コンゴ民主共和国のエフェ族の幼児は、生後 11 ヶ月の頃には鉈を、ニューギニアのフォレ族の幼児は、1 歳前後にはナイフや火を日常的に使うようになるといいます。おそらく日本では、「そんな小さな子どもには使えない」、「使わせたら危険だ」という意見が多いのではないでしょうか。しかし、ある技能を行うための判断力と運動調整能力が備わると見なされる時期は、文化によって大きく異なることをロゴフは指摘します（pp.3-4）。

私たちがいつの間にか抱いている前提（仕組み・制度、価値・規範、信条、道具など）は、文化によって形づくられる側面があり、その背景には社会的・歴史的な大きな枠組みが存在しています。その前提を「そういうものだ」とするのではなく、なぜそれが社会のなかで当たり前と見なされているのか、他の社会ではどのように捉えられているのか、と少し自分を相対化させて捉え直す視点を持つことは、教育を考える上で大切なのではないでしょうか。人は人との相互行為のなかで成長し、そこに文化が生まれます。それは一つに固定されることなく生成し続け、そのなかで人もまた変化していく…。人の成長を捉えるためのダイナミックな視点を、私はロゴフの一言から学びました。それは、教育を考えるときの原点になっています。